

第17回(2013.08.30配信)

篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

真名と仮名

「仮名」という言葉を知らない人はいませんが、仮名に相対する言葉は「漢字」という人が多いのですが、「真名」と呼ぶことはあまり知られていないようです。「漢字」とは日本語文字の「カタ仮名」や「ひら仮名」と並んで使われる言葉です。

日本語の文字は『古事記』によれば、5世紀に百濟(くだら)から王仁(わに)という人渡来してきて千文字を伝えたのが、漢字伝来の始まりだといいますが、3世紀後半の遺跡から発見された土器片には「大」の文字が書かれてあり、もっと時代が遡るのではないかともいわれています。 「仮名」が発明されたのは平安時代で、当初は女性が使うものとされていたようですが、『古今和歌集』で仮名が使われはじめてから、男性貴族社会にも使われるようになりました。この仮名の発明によって、『源氏物語』や『枕草子』をはじめとする宮廷文学が盛んになったのです。

日本語の母音はア、イ、ウ、エ、オの五つですが、奈良時代はアとエ、イとウ、ウとオの中間の母音があり、母音は八つでしたが、平安時代になって五つの母音になったといわれています。 仮名文字が発明される平安時代まで、人々は漢字によって苦労しながらも記録を残してきましたが、その最たるもののが『古事記』(712)であり、『日本書紀』(720)です。また、全20巻、約4,500首におよぶ日本最古の和歌集である『万葉集』が編纂されていますが、これらの解説が困難なのは独特の漢字の用法によるものでしょう。『万葉集』は全文が漢字で書かれており、表意的に漢字で表したもの、表音的に漢字で表したもの、表意と表音の併記などさまざまです。 編纂された頃は、まだ仮名文字が作られていなかったから、「万葉仮名」と呼ばれる独特の表記法を用いました。この万葉仮名は、平安時代になって平仮名や片仮名の基になったものと思われます。

寛平(かんぴょう)3年(981)に史上初の関白藤原基経が亡くなり、宇多天皇(第59代天皇)は右大臣菅原道真(845~93)を登用しました。藤原基経は、清和天皇(第56代)、陽成(ようぜい)天皇(第57代)、光孝天皇(第58代)、宇多(うだ)天皇の4代にわたって朝廷の実権を握り、宇多天皇のときに関白に就任しました。この際の詔に書かれた「阿衡」の文字にこだわり、宇多天皇に謝らせて藤原氏の権威を世に知らしめた事件がありました。阿衡とは古代中国の殷の時代の官職ですが、側近から実際は位は高いが職掌がないといわれたことで怒り、仕事を投げ出して政務を滞らせて、結果的には天皇を誤らせたわけです。このこともあって、宇多天皇は藤原一族が権力を握るのを嫌い、菅原道真を右大臣に登用したのだという説が強いようです。しかし、右大臣よりも上席の左大臣に藤原基経の子藤原時平(871~909)を登用していますから、藤原氏一族の権力は非常に強かったわけです。

当時、漢学の権威ともいわれた菅原道真は、律令制度の再建を目指していましたが、ライバル的な存在だった左大臣藤原時平は、菅原道真の政策には反対で、新しい政治改革の手段の一つとして仮名を奨励しました。その結果編纂されたのが、仮名書きによる最初の勅撰和歌集(※1)である『古今和歌集』だと言われています。これにより、それまで女性用の文字とされていた仮名が男性にも使われるようになって、和歌(※2)などが発展しました。仮名を奨励したのは、やはり菅原道真に対する嫉妬と対抗心からでしょうが、醍醐天皇(第60代・在位987~930)に讒言して菅原道真を太宰府権帥(副長官)に左遷しました。菅原道真は不遇のうちに延喜三年(903)死去しました。

延喜 9 年(909)藤原時平も 39 歳の若さで亡くなるのですが、菅原道真の祟りだと噂されました。また、藤原時平と共に謀して讒言したのが源光(みなもとのひかる)で、左遷された菅原道真の後任として右大臣になりましたが、鷹狩りに行って沼に転落し遺体が上がらなかつたので、これも菅原道真の怨霊による祟りだと噂されました。宮中においても、醍醐天皇の皇太子である保明親王、皇太孫の慶頼王が次々と死去し、延長 8 年(930)には清涼殿に落雷があつて多くの死傷者が出了ました。醍醐天皇も体調を崩してその年に死去しました。朝廷はこれらの不幸は菅原道真の祟りであると恐れて、延喜 23 年(923)に右大臣に復帰させ、正歴 4 年(993)には正一位太政大臣の称号を贈られました。

また、これも藤原時平の後任は弟の藤原忠平でしたが、時平と忠平兄弟の仲が悪く、また菅原道真と親交があつたとされています。そのため菅原道真は死後ではあります名譽回復できたのではないかともいわれています。宇多天皇と醍醐天皇の確執の犠牲になつたのではないかという説もあって、上司の権力争いに巻き込まれる中間管理職の悲哀はいつの世も同じですね。

※1『私選和歌集』と『勅撰和歌集』

『私選和歌集』の中でも有名な歌人が纏めたものに『六歌集』があります。西行の『山家集』、慈円の『拾玉集』、九条良経の『秋篠月清集』、藤原家隆の『壬二集』、藤原俊成の『長秋詠藻』、藤原定家の『拾遺愚草』です。そのほかに有名なものに『百人一首』があります。これは、藤原定家(1162~1241)が、北条時政の娘婿で武将である宇都宮頼綱に依頼されて、京都嵯峨野の別荘の襖色紙に載せるために選んだのがきっかけで、天智天皇(第 38 代天皇、626~671)から順徳院(順徳天皇、第 38 代天皇、1197~1242)までの優れた和歌を年代順に集めた歌集です。

私たちがお正月に楽しむ「かるた」の『百人一首』は、同じ藤原定家が選んだ『百人秀歌』と区別するため、宇都宮頼綱の別荘が小倉山にあったことから、『小倉百人一首』と呼びます。男性 79 人、内僧侶 15 人、女性 21 人の歌で、最も多いのが恋歌 43 首で、ほとんどが京、大和地方を舞台に詠んだ歌ですが、最も遠いのは清少納言の父の清原元輔が詠んだ「契りなき かたみに袖をしづりつつ 末の松山波こさじとは」で、場所は不特定だが東北地方を詠んだ歌であるとされています。

『勅撰和歌集』は、醍醐天皇(第 60 代天皇・在位 797~930)の命により延喜五年(905)に編纂された『古今和歌集』から後花園天皇の命により永享 11 年(1439)成立した『新続古今和歌集』まで、534 年間で 21 の和歌集があります。

後白河法皇の命により藤原俊成が文治 4 年(1188)に編纂した『千載和歌集』に、「さざ波や志賀の都は荒れにしを 昔ながらの山桜かな」という一首があります。「詠み人知らず」とあって作者は不明となっていますが、平清盛の弟の平忠度(たいらのただのり)であるといわれています。

平家一門が都を去っていく途中、忠度は京に引き返し、和歌の師だった藤原俊成を訪ね、秀作ばかりを選んで書き付けた巻物を差し出しました。世が改まり、藤原俊成に和歌集編纂の勅命が下つたので、俊成は約束どおり忠度が預けていた百首あまりの中から一首選んで『千載和歌集』に加えました。朝敵になった平家一門の名前は出せないので、「詠み人知らず」としたのだといいます。

なお、『古今和歌集』は紀貫之(872~945)らが撰者となって纏めた最初の勅撰和歌集で、その仮名序に「近き世にその名聞こえたる」と挙げたのが、後世六歌仙とい呼ばれている 6 人です。

紀貫之は身分のそれほど高くない 6 人あげていい歌だと批評しましたが、これらの人たちが最も優秀な歌人だとは言いません。もしも、身分の高い人から優秀な作品を選んだならば、評に漏れた人からきっと虐められたに違いながら、あえて身分の低い者の名前を挙げたのかも

しません。彼の保身のための苦肉の策だったのかもしれませんね。

※2 和歌

「和歌」とは七音と五音をもって構成される文章で、現在では五、七、五、七、七の句を連ねて三一文字で構成する短歌のことをさします。そこから和歌を「みそひともじ」とも呼んでいいます。

古くは「長歌」に対して「短歌」とよび、平安時代になってからは「漢詩」に対して「倭詩(わし)」から「倭歌」、「和歌」となったと言われています。

『古事記』や『日本書紀』あるいは『風土記』などのなかにも七音と五音をもって構成される文章もありますが、長歌、短歌などを最初に集大成したのが『万葉集』で、一般的には私撰和歌集に分類されますが、孝謙天皇が橘諸兄などに命じて編纂させた最初の勅撰和歌集だとする説もあります。

(篠井純四郎)